

令和7年度 特色入試問題

《総合人間学部》

文系総合問題

一〇〇点満点

(注意)

- 一、問題冊子および解答冊子は係員の指示があるまで開かないこと。
- 二、問題冊子は表紙のほかに4ページ、解答冊子は表紙のほかに7ページある。
なお、別の下書き用紙7ページを配付する。
- 三、問題は一題(二問)である(1ページから4ページ)。
- 四、試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
- 五、解答はすべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
- 六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
- 七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。
- 八、問題冊子、下書き用紙は持ち帰ってもよいが、解答冊子は持ち帰ってはならない。

以下の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

東日本大震災復興構想会議で議長代理を務めた御厨貴は、東日本大震災によって「戦後が終わり」「災後」が始まる」と述べた。しかし将来の歴史家は、果たして今この時点を「災後」と記述するだろうか。そうならばいいと思う。だが我々を取り巻いているのは、近い将来、より大きなカタストロフィが来るかもしれないという不安ではないだろうか。言い換えれば、将来の歴史家によって、今が「二つの災害に挟まれたつかの間の平時」Ⅱ〈災間期〉と記述されうる不安である。

あの日から、頻発する余震のたびに、次なる瞬間は今かと身構えながら生きてきた。報道される地震発生確率の無味乾燥な数字は、不気味な生々しさを帯びている。そしてそれは、原子力発電所の水蒸気爆発に伴う国土の壊滅という決定的なカタストロフィへの不安と共にある。脅威は外から来るだけではない。放射能で汚染された食品が、不可視化された経路をたどり、いつの間にか体内に蓄積されているのではないか——そんな、内部から徐々に蝕まれていく感覚も、この社会を引き裂いている。

これらの東日本大震災に起因する不安な気分は、別の不安とも共振する。2011年の後半には、ギリシャやイタリアの債務危機というニュースが社会を暗澹とさせた。それは、日本でもふくれあがった国債が暴落し、財政破綻に見舞われるという悪夢を想起させる。

もちろん日本は、以前から、十分すぎるほどの問題を抱えてきた。

御厨のいう「戦後」には、日本型経営と性別役割分業に根ざした「標準」型のライフコースに乗っている限り、生活上のリスクを極小化する仕組みがあった。そんな「戦後」の大きな転換点は、阪神・淡路大震災が発生した1995年である。これ以降、そのような「標準」の掘り崩しが進む。長期不況とネオリベリズムと総称される諸政策は、「標準」の外側をジワジワと広げ、生活の困難な人々を生み出していった。だが多くの人にとって、危機はまだ「外側」にあるものだった。目をつぶろうと思えばつぶれた。劣化する雇用と生活保障、歯止めがかからない少子化、亢進する高齢化、衰弱する地方、延々と続く不況——改善のために残された時間は多くないことは誰も分かっているが、ダラダラと決定打も打てない。いつか来るであろう厄災の先延ばし——。東日本大震災は、その不安が突如目の前に具現化したかのように訪れた。そして、想定していた以上のリスクが外側ではなく、自分の足下にあることに否応なく気付く。自分が立つ大地が、いつのまにか薄い氷に変わっていったかのように。

だからといって、あの日から何かが大きく変わったわけでもない。激甚的な被害があった被災地以外、変わらぬ日常が連綿と続いている。どこか間延びした、袋小路に入り込んだような平凡な日常。次の厄災は未だ起きてない。だが「未だ」という言葉自体が、その確率的な到来をすでに含意している。

繰り返す「3・11」の日付は、震災の死者と関係を結びなおし、かつてあった世界に思いを馳せさせる。同時にそれは、「3・11」

が、再び別の形で訪れうることを、象徴的に予示する。我々は〈以後〉ではなく〈間〉を生きている。これを前提としていかなる事を考えられるか。

災間の思考は、厄災の回帰を前提に考える。だがそれは、目前に迫る厄災の恐怖をバネにあらゆるものを変革しようとする構え——「前」の思考——とは異なる。

ナオミ・クラインによると、1970年代以降、市場開放・規制緩和・民営化を進めるネオリベリズムは、惨事Ⅱ厄災を利用しつつ一気呵成に進められてきたという。これまで積み重ねられてきた合意や規範が暴力と恐怖によって宙づりにされ、例外状態の中で改革が進められる。その結果、一時期は経済が向上くものの、貧富の格差が増大し社会不安が加速する。クラインはこれを、「惨事資本主義(disaster capitalism)」と呼ぶが、そこでのメッセージは、「この改革を受け入れないと、目の前に迫るより大きな惨事Ⅱ厄災に見舞われる」というものである。

この「目前に迫る危機」という発想は、時に熱狂を招き寄せる。「死を思うことにより今ある生を輝かせる」というのは俗流の実存主義的人生論に典型的なものだが、この種の気分は容易に決断主義と結びつく。危機に「断固」立ち向かう強い意志への憧憬、その流れの中で充実した生を燃やすことへの甘美な誘惑——これは現在の日本では、災後の被災地以上に、遠く離れた大阪において極端な形で現れている。「災「前」の思考」とは、一度きりのショックⅡ荒療治を断行することによって、一気に社会を変えていくことを欲望するもの

であり、その意味で革命の思考と同型だ。

「災間の思考」は、このような「災前の思考」とは全く異なる。

第一に、厄災が何度でも回帰するということを前提にする。その上で、それに耐えうる持続可能でしなやかな社会を構想することを求める。つまり、一回の荒療治で乗り切れるものでなく、より根本的な体質改善が求められるのだ。そこにはロマン主義的／革命的契機が入り込む余地はない。これまでも望ましいとされてきたことを、着実に積み上げていくというある意味で平凡なことである。

例えば、われわれの多くにとって今回の津波は想定外だった。しかし三陸沿岸の漁村の人々は、常に災間を生きてきたと言える。といっても、三陸を襲ってきた歴史的な津波(明治三陸地震津波、昭和三陸地震津波、チリ地震津波など)のことだけを述べているのではない。津波とはもつと無名的で、日常的なものなのだ。陸前高田市の広田半島に住むある漁師によると、1993年から2011年までに5回の津波に襲われたという。実に3年半に1度の割合である。

1メートルの津波であっても、牡蠣の養殖筏やわかめの養殖縄を壊すには十分であり、そのたびに設備の復旧が必要となる。それらの津波被害に対する国の補償は微々たるものだったため、養殖に携わる漁業従事者の中には三重、四重ローンに苦しみ、廃業する人も多かった。反面、そのような漁村の集落では、今回の大津波における犠牲者の割合は相対的に小さかった。繰り返し訪れる津波と向き合いつつ生きることによって、津波の大きさを見誤ることなく——津波襲来直前の潮の引き方が尋常ではなかったそうだ——迅速に避難でき

ていたことと、低地を海との緩衝地帯として居住を避けるなど平時からのリスク管理ができていたことが、その背景にある。一方で、強固な防潮堤で小さな無名の津波を「なかったこと」にしてきた地域にとってこそ、今回の津波は「想定外」だったのだ。

第二に、「災間の思考」は、個人に強さを求めない。例えば1995年以降、社会変革のために行われようとしていたことは、「無駄」を省くということだった。「無駄」と名指されてきたのは、雇用であり、地方の集落であり、公務員であり、社会資源であり、社会保障であった。「災前」の思考では、破局を避けるためという名目の下で、「痛み」を個々人に強いる。社会資源や社会保障をギリギリまで削減し、それに耐えうる個人を求める。だがそこで痛みが集中するのは、社会的に弱い立場におかれた人たちである。厄災を避けるはずの取り組みが、それ自体、厄災になるという矛盾が生じる。

この矛盾を懐柔・弥縫^{びほう}するため、コストがかからない対応策が推奨される。それが人々のつながり・支え合いといった用語群である。人々のアンペイドな活動を費用対効果の高い対処策と位置づけつつ推進されるのは、社会保障削減のように、国家がその責任を軽減しようとする時に、これまでも繰り返されたことだった。今回「絆」やそれに類した言葉が多用され、同時に忌避されたのも、国の責任の放棄と国民への転嫁という文脈で理解されたからという面もある。

1995年の阪神・淡路大震災が開発主義の果てに生じたとしたら、2011年の東日本大震災は、「災前の思考」のもとで進められてきたネオリベリズムの果てに生じたと言える。だが、誰もが弱

者＝被災者になり得ることを前提とする「災間の思考」においては、社会から「無駄」を極力削減し、個人にリスクを負わせるという発想は、逆に脆弱（ヴァルネラブル）なものとなる。絞りすぎた体が危険なのと同じように――。むしろ、社会に様々な「溜め」や「隙間」や〈無駄〉を作り、リスクを分散・吸収させることが重要になると思われる。これまでの「無駄」とされてきたものの削減が、今回の東日本大震災でどのような帰結を生んだか、そして、「回歸する3・11」という認識の中で、いかなる社会を目指していくべきなのか、仮説的に粗描していきたい。

出典 仁平典宏「〈災間〉の思考――繰り返す3・11の日付のために」『「辺境」からはじまる――東京／東北論』（明石書店、二〇一二年）所収。出題にあたり一部を省略した。

（注1）一時的にとりつくろうこと。

問一 この文章で述べられている「災間の思考」にもとづく場合、あなたの日常生活における厄災への備えはどのように変わるだろうか。「災前の思考」にもとづく場合との違いに触れながら八〇〇字程度（句読点を含む）で説明しなさい（四〇点）。

問二 この文章で述べられているように、社会に様々な「溜め」や「隙間」や〈無駄〉を作ることが、リスクに対して有効に機能していると思われる状況について、具体的な事例を挙げながら一二〇〇字程度（句読点を含む）で述べなさい（六〇点）。